

溫故目錄

五

~ 5
5631
5



門 八 〇
號 5631
5

温故日録卷第十

淺草
文庫

神無月

應鐘

此月律より是より異説ありと紹巴初字抄の
景物より十月律の名也といふより千五百番

哥合母初冬哥云讚岐

輝くれてありまはさありひれきれお母こころる冬へ春へ

六条院宣旨家集の哥

新後古今曉ハカのノ寺ノ小ノ風ノさておよあらるわひさささん

或ハ發ハ句ハままととこころろるる鐘ノひき哉

豊山ニ有ニ九ノ鐘ノ霜ノ降リ而シテ自ラ鳴ル山ノ海ノ經ルより霜ハ鐘ノ別

小春

冬ノ日ニ其ノ暖ク如シ春ノ故ニ謂フ之ヲ小
春ト初ノ字ノ記ス嫌ハ詞也 妄ニ言ハ抄

昭和十七年
三月十日
浅草文庫
蔵書印

十月更衣

一日 掃部寮夏衣御装束と撤して
冬衣にあはせむわふ 公事根源 年中行

事哥合よ

ぬらなく露ものぬ衣も法今もぬす初河ぬ

始水

令月

射場始

五日 射場席と年中行事、哥合よわり

公事根源云先此月廿三日は左右衛門弓

場比棚とゆく、天子弓場殿よおさせぬひく弓と

御覧すしこい以下束帯して是とす天子

射席とあはれく弓夫と御座れ左右れと記よそ

らう是群臣とひくく弓と射席ふりて誠よ文

武二つれ道ハとかくへうさうら故よ今天子も弓場殿

よおさせぬて武道とたうるせぬよ口傳よ射場始

かゝハ賭弓とてさす賭弓かゝハ相撲乃節あはる

ととやハ明題ニ為強

御垣も此所あつらふつりてきふをけまはれを始をれ

年中行事哥合よ

名のこつとあはれまの射席と今ハひくると記無家

度菊宴

同日 群臣詩と作酒とぬまふ
公事根源

木枯

色とびすひくも冬こもハ秋と云説もわり也
新式抄さうさうハ秋冬風木枯なり但こり

乃枯れハ川風もよあり野宮哥合よ正通冬物

と難して閑口早ハ雲御抄

本指乃枯れ初風吹ぬとたさるるやあふら声也

誠よ時雨霜雪とさりり初風と暮秋初冬

乃物なれも宗祇も閑乃初風とるさ一葉かぬといふ

三集上下

時雨 三月より四月にかけての雨也

時雨 三月より四月にかけての雨也 流布 三月より四月にかけての雨也

木ノ葉ノ 各冬也

志 冬也 寒雨ノ風ノそひくもの

古來抄物より小あやかり来る事あり之新式講

尺乃時可ヤ志す共西行家集

霜 三月より四月にかけての霜也 初霜ノきゆりも同前

初雪 冬也 初雪見参トヤ也 桓武天皇正暦十一年十一月より初雪ノカキ

不足あり何と云はれ涉願寺へ修繕せしむは執事法師これとなり春雪も皆れ鼻のわく

程子ハ取の衆以下必参内して雪山と此れを
公事根源 差人所衆として廿人あり六位の侍
可然輩補之職原
抄あり 禁秘抄よ委

正月 寒 三月 月寒 夜寒 寒夜

夜寒 寒朝 朝氣寒 今朝寒 冬也

炭竈 炭とくろり 炭賣

埋火 三月より 火桶

櫛 夜分也或ハ十一月の景物母入本あれも火爐
の類乃次よくよ記之三月より

綿 勿論冬也 流布

被 冬の中た露なを代むもしくハ秋に但露乃分
してハ冬ともなり 吾言抄 師説ハ秋なり

久太羅野 野乃名也 八雲

枯野 植物よ打越と 嫌へ 流布

名草 枯 荻 芦 落如くよなりとびといてハ
秋也 流布 只りりハ冬なり

枯生 薄 秋也 丈木才北ニ為家哥よ枯生尾花と

凡さゆ富士れすもわらわをかしふは尾記書と云

賜枯葛葉

おとひて冬也かつ落葉
すうはうろく
流布

紅葉散

紅葉散て物を染る冬也新式是ハ紅葉乃
ちして松もみやの物上のもつは然事也

紅葉散初也

紅葉散

は月をいれじ
ても冬は
流布

黄葉流

も冬也
流布

紅葉筵

只紅葉れり
ころと云
藻陸草

後撰羈旅哥

草枕りららひらよむく心とくくめなまや
中めやうきとみらひられ文局 宵柏

大發句帳冬乃部はあり

木ノ葉

本紅葉の落るに月をいれ
じとひくも冬は
流布

一衣

一ノ雨

一ノ舟 冬也

落葉

本紅葉同
三月はわろ

朽葉

色と枯
秋は冬

名木枯

これ冬
なり

柳枯

冬の類
冬の冬也

凍柳

冬の
柳也

網代

一ノ柳

水魚

十月比ハノ景物也 八雲御抄
魚音小今案俗云水魚是

也初學記冬事ノ對雖有氷魚霜鶴之文而尋其
義非也ヨ小魚名也似鮎魚長二寸者也 順倭
名網代して冬ノ大和物語

は氷魚乃使と云事もあり

柴漬

積柴於水中一魚得寒入其裏因以薄圍捕取
之順和名 日本紀は柴こくはくや下あり

采あつても只本枝とし水よこりけり其あつ
 まりよ魚と積てころも藻塩草スズクサ 罽スズクサ亦作柘スズクサ爾雅
 岑スズクサ倭名 但五言抄云少し此を小采面と嫌へ
 日本紀に柴とくはく物一とあり然ハ抄とも嫌へ
 後十月はしれ物とんく堀河院の御時百首
 此哥なりきり初冬心とらり藤原仲
 實朝臣

いそはろはたりしれ少し此を崎輪サカキとる冬来よきり
 或ハ十一月此景物といりすく三月よもころり
 氷よおりくよと合しり
 少しつをよとらりしれとと物れハこきんもり氷一り

温故目錄卷第十一

霜月

狩使

寅日 豊御狩トヨミ 此ハきふ五節所よ狩りん
 ためふわの狩りきふをいぬめさけし使のあり
 とられ使のハ也是とこハ此狩トヨミハいり柘五
 節の藤姫のとりハ清御原キヨミ天皇天武天皇也吉野の宮
 ましめて琴と弾ウタうひの山ヤマの岫タテより雲より
 天女あまきりりて琴此曲ハ應オウしてあまの羽衣ハ袖
 と五度イタヒ観ミしてまひく
 ちとあまのまひ 守もむをたをふ記てをとあまひ
 こころひきりしや 是五節のとりめなるやあまを
 天平五年五月よまろく内裏ウチノミて五節ハ藤ハ

ありきりて本朝月令公事根源をたえり
日教とてこれありは侍とてかゝるはまきり
堀河百首の哥也万代三品是こ猶仁哥云

鎮魂祭

中寅日 是れ人魂魄の二玉あり魂を陽
氣魄ハ陰氣也此祭ハ離遊の運魂とま
りて身神の中府より功なり宇摩志麻
治命の時より事おるより旧事本記な
りて此祭と如法をまらるれは殊勝の
初とてやまは白川院ハ涉脱履の後も院
中より猶行れは東宮中宮より七年く
る事天女二年よりわかれはと真行せ
貞觀元年十一月神祇官より行り今ハ
の事よがれ公事根源 夫木前中納言為並

日蔭として朝より夕までなすつるは世をて候ふこと

新嘗會

中卯日 新嘗祭ハ神今食よに
此の稻を神に奉りて始は代乃始ハ大嘗
會といふ年とのハ新嘗會と也ト食ハ
摺衣日蔭と着寸用明天皇二年四月より新
嘗の事ハより大なるハ神代より事ハこれ
日本紀より天照太神あるをまらるれと
より公事根源 新嘗言塵 年中行事哥合
いはる秋おさるいかにして年ゆらけは
豊明節會 中辰日 是ハ今年の稻を神に
あはれ節會行り新嘗の祭ハ参り上
相弁小忌とてよりハ諸司の小忌と束帶の

皇代卷下

よきこととせしむるに青摺をとりわると
 つまひにやふ弁の上首とくひ南殿のひきよは
 子とせしめて内弁以下座はく白酒黒酒の盃を
 とりて大歌別當大弁りゆりて兼姫のり五度
 袖をかへてかへりつれとにさるる上達部五節所
 ころひく催馬樂もとくふ節會の發考は
 節會の程露臺の能舞こひきくらうふ殿
 上人の換なをとりひく節會の座とて歩遊お
 う事とくは堪ゆる人こそ歩帳の東よりくりて
 此事を書司は歩とめは歩手ありこふ十六日
 の節會なをとり時ふとくひく此事はさる也
 今日辰の日れ節會ハ大掌會の時ハ辰日と依
 紀の節會巳日と主基の節會ニヤル也 公事
 根源 おかしくとれありとハ惣して節會の名あり

きふはかきくらす其志さハ六百番のかりの哥合
 かさのくさあり事也 年中行事哥合注 日本
 紀ハ宴會こそとてこれありすとよめは冬よなれ
 句とよと一た去大法ハ豊明れ節會霜月と本と
 す年中行事哥合よ
 みのなをよとれおれらおとさきふとれおれと人
 豊御杖 非夏冬也神祇也詞林良杖
 云大掌會の歩襖此事也
 小忌衣 のく字ありてとてなきてもは字かたは四をこ文字
 濁れ源氏幻の巻五とらり比の西は頭中將
 差人少將なを流とてあさざらりすことよもこよ
 けのやすくことあり河海抄云小忌青摺山藍摺
 也花鳥云十一月中卯日新掌會辰日豊明節
 會ハ山ありあきすれ小忌とハ物と着とら也

一代は一度は大堂會しむるものなり

一条禪向宗祇は清傳授け大堂會れ説云小
忌といふは神事此衣服也白き布を張て山あお
りの草として櫛本と摺る物也大なる狩衣のごとく云
五節は素人れさるる賀茂は臨時の祭又大堂
會の時用物也巴説大忌衣といふ衣も此時用云
云神祇 小忌袖 青摺ハ小忌の事也臨時の祭の
なり 舞人のハ青摺の名付大堂會
乃とれと小忌と 辨引抄 山藍袖 山藍衣

日吉臨時祭

中申日 是は建曆三年十一月十八日
延曆寺の流徒長樂寺にて官兵のふふは
誅で心かやの事として御願ありとて公事

此祭

下ノ酉日 賀茂臨時祭也先兼日ハ試樂調
石清水よおゆし社頭乃義とて使舞人ゆ系と
わたり此儀も殊麻の御障子とて清引並衣
ハ清草鞋とて額間より出御せしむる階乃
間乃さかりは庭南北二行ハ座とて使舞人
はくしるは本柱の神樂乃所作人倍徒近衛
召人は出清きて云やあまハ貴子長階ハ候
寸階乃下ハ頭已下迄さて使舞人ともハ勸盃お
はくし神樂あり庭燎よりしりて朝倉其駒ま
てくふ庭火もさかろ哥あるをハ人長さるる
皇御神樂もてて祿有此祭れとてハ宇多御門
の王侍從とて奉りてしりて賀茂の
大明神をりしりて臨時祭とてへさるる

於我ハさやう此事知ゆる御門へしきせぬと
 させ給きれし處ありてしこくはくせぬひはる
 け程なくしておひりやとくはくせぬ位ははせぬ
 し寛平元年十一月より臨時祭とせしむる事
 其時の使ハ本院乃大臣時平公の右中ね
 宗祇帝木別勅 江次第委 調樂ハ千廿
 宗祇帝木別勅 江次第委

日蔭絲

日蔭絲 時人著るる裝束也日蔭乃糸づな
 同神事の時くも事也花鳥餘情ノ新堂會
 豊明節會ノ小忌ときる人日づけぬづと
 冠よわくる也日蔭草とハさづりけと
 じまびくわくるハ日づけ草ぬわと
 かつとんと日本紀第一よありし事と

日蔭糸は白き糸と総角して左右八筋或ハ十
 二筋を冠乃左右此解よまじく
 又新式抄ノ日蔭乃糸と賀茂臨時の祭の時
 而幽居焉余乃六合常闇晝夜不分群神愁
 手足周措爰天鈿女命以真碎葛為鬘次
 籬首白為手經歌舞
 形も今もまじく云

神樂

神樂 里 非居所 新式 大内乃外 庭燎

神幣 杖 籬 弓 劔 鋒 櫛

片折 諸拳 葛 蕪神 以上採 物哥 宮人

水紛志天 難波浮 前張 階香取

井奈野 脇母古 以上大 薦枕 閑野

小菅 磯等崎 篠波 殖槻 総解

大宮 湊田 蚕 以上小前張也新式ニテ神樂

可用之神樂 名之蚕准繪但秋、季ハ不
方と可レ爲本ト 得錢子 木綿作 明星

以上星 歌なり 晝目 湯立 朝藏 其駒

竈殿歌 酒殿歌 神舉 以上雜歌也神樂乃

わり畧寸委梁塵愚案抄より拾苴抄よりまきぬり

東遊求子 神祇也新式神樂乃名也

冬也攝家崩白殿なるの賀茂やうり

冬乃糸下乃未人よりいせぬそれハ非冬也

非人倫也新式抄或書云神樂乃名と説お

まとも梁塵秘抄なるふりて常ニ用白殿の賀

茂請をふハあつとト世は冬ゆきあらず夜分

をいあすも先冬也神樂此よりいもの名とハ

雪

降り花 降物也非植
物非正花

沫 冬にけりしめ流るる春の
雪に但万八は十二月

よあそむ雪あつとつり八雲

志すふおあそむあつとあつぬも梅の花さくはあめあつて
あそむ雪あつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ

まきともいふ此哥よそしあつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ
じり袖中抄取要 其弱如水沫 倭名故云沫雪

斑 八雲 雪吹 篠小雪風 冬にけりしめ流るる春の
袖中抄 梁塵愚案抄よハ秋風のしりしり云

分たりの類也云云 其義冬にけりしめ流るる春の
波 冬也両方嫌え似物之嫌様雖非下様當時

所用如此両方可混合之物者嫌え不可混
合者不嫌之秋これ新式れ詞也よハあつとつり八雲

合するとしりしめ流るる春の
あつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ

あつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ
浦らりしりあつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ

あつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ
一氣 雪のさゆり 清輔初学抄 雪をれ曇云といへ

あつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ
堀河次郎百首 俊頼哥云

あつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ
あつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ

あつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ
あつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ

あつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ
あつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ

あつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ
あつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ

あつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ
あつとつり八雲にせ人ま雪とあつりあつ

夏の詞入て不可為降物 新式 月の霜雪両方
 嫌之とも天象降物共は嫌ふと云心也夏の詞入て
 非降物 月の霜雪と云事と云て本は霜雪
 不混合故也又目前は月と霜雪と見ぬ一は新か
 らし冬成とも降物に成へず只月霜をともし
 天象降物也是と云方は嫌ふといふ 流布 新式の
 可分別物のうらふは方一嫌類はあきくを記あり
 げ月れ雪霜は夏れ季なる不可為降物と筆を加
 らざるはすくぬ秋とて同一事也夏秋ハ雪のふ
 らぬ時をハ月れ霜の雪母似とてあきらむるは降物
 はなるとすといふは夏秋の句とてあきらむるは
 月れ霜の霜雪はまろひくは句なりとも冬はありて又
 ちり物は折越嫌といふ夏秋の句あるは降物ハ不嫌
 霜の字ハ五句雪の字ハ面但月のうらむるま

との霜雪ハはは汝汝は不及降物也又霜ハ秋とす
 なれハ月れ霜ハ雪ふといひて句新より秋の句を
 降物に成也月の 下 霜 先可為冬但依句可
 霜ともしハ冬也 為春秋 昌程説

下 水 同 林 只雪ありてや一なり哥林は雪
 林といふ名取もあるは句は

六花 雪の事といふもさるは不好詞也のせとては事
 かきとも不好といふ事と云ふもは載之可

此類なりしは異名とてあらず 流布 昌休は
 七種もあつては花野をあらわすは名を

霰 ミツ
 も冬をたらし

霰 ミツ
 も冬也

なすくきよめり

千鳥 三月よりわさる月よりひて
ひても冬也 新式抄

鴛 一ノ脊

脊れありは似たる哥枕也

鴨一本 志井池よりわさる月よりひて

鴨 三ノ鬼舟

舟れありは似也 八飛云 萬葉第十六

おろし鳥 鬼舟と云舟はさうさやれ崎わりのやれはせ
あさわかけわやれをゆとゆれをゆわわりはわるとさ
夫木第廿三 按察使云通哥也同集卅三 歌物で
平よ

又鳥と舟ともんるは哥枕よ藤原親佐
とらふとあらはれ沖ようかともあまれ小舟よんまゝくそす
はくはくとも両方ニ可混合物也

鷓村鳥

鷓小鴨乃事也坪とのさるを
也 巴説 冬也りりは社といり

秋沙

河よわらるる也 八雲をぬきぬき
あり水も冬之萬葉山際よ渡秋沙
一各沈鳥貌似鴨而小昔上 有文 順 倭名 万鴨を
とも書惠慶法師家集よ

風俗上野哥 曰
をり鴨さるるの池のや玉藻、實をりて
水も新式冬と云云 流布一説

都鳥

水も新式冬と云云 流布一説
雑といふ其義非也冬と也

鷹

三月

著

三月よりわさる月よりひて
ひても冬也 新式抄
あさわかけわやれをゆとゆれをゆわわりはわるとさ
夫木第廿三 按察使云通哥也同集卅三 歌物で
平よ
又鳥と舟ともんるは哥枕よ藤原親佐
とらふとあらはれ沖ようかともあまれ小舟よんまゝくそす
はくはくとも両方ニ可混合物也

落草と云事也多之所と
鳥落草 草取鷹ハ
三百首注

多と草よといおとして多然とすして多の落草
とらると云也又草らるともよみよみ 藻塩草 多

追草して多れしとらると草らると也又草乃
とらしたやとらるとも草らると也 百首注 此

のられ詞悉冬也四季のじつしつともの九巻詞
よはさて可知事共八百千丈此帛よと

うたのうら四季の大綱わらとものなり
寒夜は鷹鳥を捕して生かす足と

煖鳥 明もはくたの三智抄

温故日録卷第十二

師趨

唱佛名 十九日 被綿 其ふし廿日まゝ三ヶ日也或
一夜も例あり仁左殿の御本そ然うし

て清懐此中よけく南北額此間よ又南北よ机以
たて佛像塔形となく佛前よ香花やとせ

るふひさしは地獄畫れ清屏風と川出居此を
宸勝講れと出居此前よ火櫃よおり松てす

女儒こんとけしひさしは著す初夜中夜後
夜よの清導師ウラるさあわる人是とつ

ひろけ綿れ事と衣も此わらわら入てすの
これ北のよ内侍の御簾下といひくえすとて

かゝる差人沙導師此庸よわらざる事として名謁
あり所衆流口まゝにふたりの栢梨此勸盃かゝる云
幸ふとそれハ右邊衛府の領よ攝津國栢梨庄に
よ所より御酒と奉りて殿上よ勸盃のあはれ
栢梨よも所領の各よゆゑや又佛名此中
の夜おと大ぬれよあり弓場よてせつれり
右大將たつひゆつるうらなす程おとゆゑに
えゝゝかゝ佛名此沙導師ハ昔ハおとせゝか
ハ延喜の沙代たゝふハ夜沙殿よ和琴と
ハ此合強をゝゝやハ仏名とハ三世此諸佛此名
号と唱て六根此罪と滅せよハ誠ハ佛名經よ
ちゝ所此功德ハくゝるゝや寶龜五年十二月
ハくゝるゝ美和此此ハ毎年佛名三十日此間ハ
諸國よ殺生禁断のよ格よんゝるゝハ奉根源

貞觀此比よ一萬三千佛とあづよあつて諸國
へくゝるゝ國史此記よん及ハ此り今ハ吉
日撰れり
くゝるゝハ松もてゆゑハ此九もゝるゝ
是拾遺愚草貞外上よ冬夜此哥也ちり松ハ佛名の
夜よかゝるゝ事欽可尋之新撰六帖佛名光俊
おとるゝおとるゝ此のゝ今よをゝるゝ
こゝつゝニ此此の中ハおとるゝ栢梨をすめよと
六百番哥合よ顯昭哥之後頼家集佛名と
えゝの沙各よあつるゝハ此のゝ
晦日 ちやらふ声 ちやらふあやらふ事ハ大念入寮
鬼とけり陰陽寮祭文とて南殿此邊ハ
くゝるゝ以上以下是とを殿上人も御座れ方よ
辞て桃のりあれ夫よちりる仙花門よちりて東庭

進難

とつく御前御前は灯灯をたけりとも
す東庭朝餉東庭朝餉臺盤所臺盤所のまのりもすりも灯灯臺
と隙隙ちりもてりも追追雛雛といふ年中年中た疫疫氣氣をハ
らふ心也鬼鬼といふハ方方相相氏氏乃車也四四目目ありておそり
まのり面面とてて手手よそがら又又恨恨子子とて二十
人人紳紳の布衣布衣さうりものせ疾疾て内裏内裏ハ四門四門と
まうり慶雲慶雲二年十二月二年十二月より内内むすげ年年天下天下よ
百姓百姓おろく疫疫癘癘よなまきれゆる故故 公事公事根源
ひり源氏源氏またやふあこやゆりも雛雛と追追としてゆ
り屋屋らふと追追と云と云こも祭也 年中行事年中行事哥哥合注
祭祭すに雛雛ハ疫疫とといひんふ事也戲戯のやうまれ
ぶもいれ礼礼として周禮周禮礼記論語礼記論語よものせとりそ
まより後世後世と乃乃礼儀礼儀志志よあらうるべし云云事事たう
別文別文文選文選よのせとり張衡張衡が東京賦東京賦は詳詳なり

又後漢志後漢志第五第五のあり追追北北字とやらふことじ也
雛雛一字一字ともををやういことじ也源氏源氏幻幻よあやうん
ともありまふも宜宜旨
ふもこのあやういことじもまといと人人やうい
九月九月代代のとりやうあのことともなうらうけい
同集隆季隆季御御哥哥也年中行事年中行事哥哥合合也
今今も一一本本なりてあれ夫夫のいりりともは年年とまはり

年終玉祭

和泉式部和泉式部哥哥也

是ハ後拾遺後拾遺よ十二月晦日十二月晦日れ夫夫よとゆり
玉玉ころす年年れとりよはをりたりやふもあつんとするん
是ハ詞花集詞花集。歳暮歳暮代代哥哥曾祢曾祢好忠好忠詠也清少
納言納言枕双紙枕双紙よゆりもとあはれはごもりあふ
とれりてなれ人のい物い物よとあつりやとありれあふ

よといつるかこ歳乃終の玉きつりこ十二月以玉祭よ盆よ
荷葉とちくやうは標とくひ物よちくあふく報恩
経よ十二月晦日午時來正月一日卯時歸
あり此外よし聖靈乃來我あり彼經よ委
爲岡見 堀河百首よ後頼朝臣の哥よ思ひは
これ海日の長高き岡よのりて藁とさうさぬよ
きて遥よ我家とんきとあつる年よべさ吉凶の
事見ゆるとことむと明年れ吉相とゆふ
荷前 撰吉日 先十三日はけさくと兼てささめ
使ハ公での殿上のもろ次官よひり荷前
れ使の定乃決わくよ元日れ掇侍從乃ささめあり
是ハ朝賀乃ちめ朝賀か見時と猶よめささめあり
ささめや荷前ハ十陵八墓よ年れとら幣帛

とささめせ竹小先十陵の第六天智天皇れ御ささめ山
城國山階ありま 中門御馬よめされて山階乃
里よ行幸ありて其まゆ御所ささめ崩所
とづく共知人なく御所ささめ崩所
よ御所ささめ崩所ささめ崩所
さ其外ハ御所天皇れ田原れ御所ささめ桓武天皇
の柏原の御所ささめ謀道天皇八嶋れ御所ささめ仁
明天皇深草れ御所ささめ御所ささめ御所
及んき 公事根源 延喜式祈年乃後れ祝詞
よ荷前とまてささめ御所ささめ御所
輕人之のささめ御所ささめ御所
荷前のささめ御所乃山陵へささめ御所
とささめ御所ささめ御所ささめ御所
行事哥合

内侍所御神樂

撰吉日 此御神樂ハ一条院此御時
隔年ハ初り美保也

初り年ハ初り事ハ成ヨリ壽永代乱ヨリ内侍
所西海ハ渡御ナリテ三年ヨリ事ハ初ル都
ノ参一時ハ三夜ノ御神樂ナリテあり別
臨時ヨリ大ニ神樂成ヨリ天照太神
御事ハ初リ時諸神此ヨリ天鈿目命真
碎葛と曼羅と羅と午繼はて歌集庭燎と
いみ人トリテ事ハ初ル我朝ノ風俗神代ノ縁
起他ヨリ事ハ初ル其儀式カノ委事ハ猶公事
根源ヨリ各目抄内侍所ト賢所ト云也

年内立春

古今日年ハ初ラヨリ事ハ初ル冬ナリ
ハ初ラ春代哥ハ入連哥ハ冬ナリ

年木樵

正月ヨリ事ハ初ル
薪ト云々也

衣配

冬也雜也トノ説ナリ 流布 來正月ハ料ヨリ
と師趨ヨリ事ハ初ル源氏玉ヨリ此卷ヨリ

曆未

曆卷果 曆卷返 曆右卷 ひとらてれ
共志子代事也新撰六帖師趨哥知家

一奉代ヨリ事ハ初ル
惠慶法師歳暮哥也源仲正宗集歳暮哥云
初年ト云々此ヨリ事ハ初ル

春と隣

歳暮也但晦日ヨリ
すといハリ 兼塩草

春近

待春

守歳

冬也新式聯句乃中よりあり新式抄云午とを
掘河後百首よ除夜よ基俊

年籠

夫木歳暮乎信實朝臣
いほくもさしとあつてふへわし今和らう此年とねん

年終

行年 年歸 流年
左瀨 歳暮 三冬盡

遊故日録卷第十三

非季詞

栗寺神

植物の類也雜也 流布 大和物語

栗寺神 植物の類也雜也 流布 大和物語
栗寺神の由りては神の由りては栗寺なるが
もとられ神の樹神也萬乃木をまわりの神なりと
栗寺なる神と云ふ然家成卿哥合落葉題藤通憲
がみちり栗寺なる神の由りては栗寺なるが
基俊判云とらり神の由りては栗寺なるが
あつて弘仁式乃三綱栢のころみりく見ては
と事なるてりゆす
私云は事此證よかのうを此并をひきりうを
りともりては弘仁式とらふ可考と此并

とらりてハハとささる他木とたつわらふ詠次他木を
由りんとささるす無名抄云紫ゆりれ神とハ本
多とまの神本よおりす袖中抄略記之細流
云紫守神ハ柏木よ限す諸木よゆり樹神ハ
名也金葉集秋部月前落葉源俊頼朝臣
嵐とや紫ちれ神とあらん月よ紫の多句てきり
此哥落葉とらり證哥よハ後代の哥とも引用は
信濃すこれ明神の祭ハとせよ

諏訪祭

十五度あるゆハ雜なり

駿可舞

昔すこれ國とさゆハ神女あまこりてまじ
いと野豊乃まのひけとくまふと今ハま
よひことあまのいよすは是也
袖中抄此哥後拾遺云式部大輔資業伊与守

よゆらる何のまハ三鳴明神ふあまのそひ
してこそまのそと能日法師らるる

梅宮

櫻官

非名取修勢ハ
末社也 流布

神事

鹿野莞

佛乃法と説多る鹿野莞ハ事ハ
雜也 流布 句神よりて秋多る

涼道

極樂乃事ハ雜
也 流布 句神よりて

黄泉

非夏三途乃名也非水邊
黄泉神代卷上兩点也
ヨモツクニ

法之為尔菜摘流布

觥月 心は二句嫌也心は月也非秋釋教なり

心月 釋教也非夜念 新式月は七句去也心月輪乃也同面は秋の月可有之又これより月とわらる事

胸は月日同前 新式抄各不可為秋但秋とてす

新式増抄 是は秋もあらず可依句同を年とて秋也

穀梁傳云陰陽相薄感而為雷

雷 詳は性理大全より

西吹風 此師吹も雜也袖中抄云

いらいれ風とわらぬこと

天浮橋 非水邊

此事也

櫻 拾遺愚草中

思ふ心こそそわひはけしめはれまのハまれまを方

年花 年乃

放遠 多差とハハづくすも申うんまかりた金神を

まわたり又ハ臨時ハ天一神太白神あつるふ

きは其方ハ中ぐで先とわえりて其方をたがて

其心さうさあへゆく事也拾苒抄ハ委源氏帚本

の卷中河乃方たふも内裏より葵上乃御方ハ

天一神、うさざらとまハ也帚本ハこころひあが神、ら

らりハうさざらて云 三光院殿ハ中ぐとて

中央ハ神として中神とも云又長神とも云也兩義ハ天

一神此事也内裏より天一神此... 細流
 金櫃經曰天一立中央為十將定土口内云云
 中央の故より号中神天一神地星靈也四方より五
 日づ四隅より六日づ巡行すかやうより見と重祿て長
 こあつゆへ長神もよみ此神乃ますくを塞す
 巳酉より丑卯角より六日ありし卯より東より五日あり
 庚申より辰巳角より六日あり丙午より南より五日あり
 辛未より未申角より六日あり丁丑より西より五日あり
 壬午より戌亥角より六日あり戊子より北より五日あり
 癸巳より辰巳角より六日あり
 天つらり竹小見成天一天上と云び日より十六日乃同
 も八方へ行ても障あり此神乃於功は山(方違
 あつ事なり抄 順倭名云天一神 天女化身也
 大白神

ひとあがり共金葉集

きこしあがり共金葉集

作田 雑也 堀田 去より一云説わり尋其儀非雑

野遊 非春 新式

有水 雑也ひとふと云てハ夏也只水を結ハ雑なり新式
 汲より分よとくハ夏ハなるすこいつり 流布

水烟

波花

水邊可嫌之植物不嫌之 新式 波は花らつ
 秋心なるまハ正花也志りハ春乃季也植物より
 句嫌也如此受師説也冬乃詞あて入てハ正花
 あす春よあつん植物よあつす但句花より波を

花よたるとうらなるといづなり
とも正花よわらす春よあはれ 流布

瀧殿 六釣殿 夏に泉よのそとつら亭也と或物よあり梨
之昔ハ夏に用ゆまとも當流非夏云云 猶可辨

桐壺 下名淑景舎 とつ不在照陽舎北 順倭名清涼
殿うらうらと也 咲花折 ちくけつとをいひめくさぬ

濁法 濁法 とげつと濁也源氏なまに志ぎいさといり高
此字假名よハさとわく朱雀院をもすすくぬんとす

忍春 忍春 をもくろぎまかされいもいし時ハまやといふしなり
げいまやこいしア 辨引抄 桐を庭よりうられら

此母桐壺とリ也舎をつつとリ也 ハハハハハ 雑舎を
ちいし殿也 年中行事 弁合注

梨壺 照陽舎 在温明殿北 順倭名 梨を庭より
られちりきりや 年中行事 弁合注

橘都 藤原都 藤原宮 非植物 藤原のくも氏此事ぬれ雜也
流布 藤原と名也大和にありまよ

志賀山越 有為春之説然而近來非春 新式 志賀
山越ハ北白川の流りくつらつらりのりり

如意嶽 如意 志賀へ出る道也志賀此山越ハまよ
こつすつとすす事也但堀川の次郎百首よハ春
の題よ此れより六百番平合も春の題よまよ

堀川 堀川 此百首を例よせらぬア 詩林良枝 まよ
まよし連哥よハ雜也其
中ハ袖中抄よ猶委

中ハ袖中抄よ猶委

須磨霖雨 か夏也但其儀あつす不可為夏 新式昔

萬葉第十九は霖雨モナサと云ふ事あり又神代の上巻は

霖カと一字成りたり兼各苑云霖三日以上雨也

霞雨 雜也かるとんハ雨の名のそと

霞谷 名所ありと云説あり 流布 山城の名所也

柞森 山城名取

柞山 同山城ハ雲津扱あり 壺言扱はとんハ秋は

木葉里 越中現存ハ後光明峯寺扱改

又ま本よあり 寺あり

木葉沖 近江湖の沖

藤河 表濃世の表川あり

泉河 山城

花山 山城名所也句祈よりて可為春咲白ふ

櫻川 常陸非植物水邊也他准之

櫻井 山城

近江名所方角あり同名丹波あり櫻の山

近江又後代詞は頁余こりり八雲清抄俊頼家

集は源後重

花多きさくらなどいんよりあまたありてのきさ

け昇り八田上りて八月ころりははきくかりきり

そいきりはあきよさくらたかきりきり道のきり

きりしやきりていりり拾玉集才四

きりりやきりりなよりきりりはも花さく

月林 山城

同上 後拾遺第十八

月輪 さくら果るるは宿城なりはきり月はたきり

月夜 堀河次郎百首

有明浦 越後ま木

有明山 信州或

月山 出雲ま木

照月山 未勘奇

枕あり

五月山

栲澤一説佐伯山乃字入て之
しるす所あり但句廿しり夏あり

月里

山城
八雲

月讀里

近江夫木
よ所あり

月讀社

伊勢

月讀宮

同八
雲

月讀神

伊勢外宮
御事月

よき男こ
もへり

月弓尊月夜見尊月讀尊
一神三名紹
巴乃説也

雪山

不可為山類 新式 天生大雪山乃事也
谷うたれこれ衣よ方をわしくしを流るゆふ乃やう人
なしくしあり 流布 新撰六帖光俊哥也雜也句神よ
依て冬也天生小常よ雪よ山

依て冬也天生小常よ雪よ山

雪消澤

大和堀川百首よ
春日野も書け此はは神られてるるふここせらと

雪白濱

但馬
八雲

雪高濱

佐渡哥枕
よしあり

名氣山

未勘所枕よしあり
右者花月書よけく一ししありくしあり

す事と少く載之あまのくそのまき志事る物ハ不入又
よのこの此名所よまきさう事あまきとも際限を記
は大綱とあうる物ハ自余准之名所ハ悉雜たり

野緑

山乃緑ホも植物よ何と打越と嫌也 流布
野乃緑山の緑ハ非秋青色ことり此をあらと

野山よむしひくも秋小あす

野ノ 雑也植物打越嫌但露志多記

稠チウ 雑也植物

打越嫌なり

山橘サンキョク 雑也萬葉第九よ言なり詠合る哥あり

古今 我ふも思ひついでに山橘の色よいて思へ

實あつくちる草へ髪とたの時用物とも 祇注

ふらふきつる夕乃れきつるのこもこも山橘の色もかたつす

新撰六帖知家哥也榮雅抄云世俗は藪ヤブ楸カウ子シ

の草也云云古歌よなりくもつるもの

蓬

葎ハシラ

淺茅アサキ

壁生草ヒツクキ

草生而クサナハ も雑也

木賊

千種

毎言抄は千種このりて秋なりといひられれ字々色の字と書写する人の脱ツ漏ル志々秋千種この草の別より尋其儀雜なり今抄はもわやまらありて一後みかんゆりれあるも其書写する人又其作者よなりてハ何やまらともおりゑりの相よれ凡夫の志ともあれハるる人刺サへつす

蘿 苔代類也雜也蘿乃鬢曼同系ハ冬也順倭
名云日本紀私記云為鬢曼以蘿

花紅葉 此はききも勿論正花也四乃内方り如此有
四季をけり物ハいつても雜也但物よりり

てそのはよりりこよひりてその季よなる事お不
一流布 花紅葉此句ハよりりすも之た今見る
よハすくす若現在ハ紅葉と双て見り心乃よりり
秋の花草花なるとして正花よありす秋成へ

松落葉

竹落葉 雜也夏といふ説
あし流布

柏 兒手柏といひくも雜也安加良柏
秋也といふ説不謂也是も雜也 流布

指鹿云馬 史記曰趙高欲為亂恐群臣不聽乃先設
驗持鹿獻於二世曰馬也二世笑曰然相誤

耶謂鹿為馬問左右左右以默或言馬以阿順趙
高或言鹿高曰陰中諸言鹿者以法 秦始皇本
紀拾遺よおひりてるといふ人ありきればな
り

猪

瓶 夜分
なり

兔 かやれ事ハ志れり事ハ志れり
先例乃目錄をこれあらしめり

鼯 夜分也獸
也流布

月毛駒

尾花蘆毛駒

新撰六帖知家

まのうらやまをさるるのたはむらじのたはむらじ

熊月輪

新撰六帖衣笠内大臣

奥山よこひあはれぬ月輪たはむらじ

鶴巢

同子

鳥 同浮巢

鷗

巢とても雑

也 新式抄

放鶴

人の流るぬ鶴代事也但しるれ鶴不入事也

哥よハおわりより鶴とくよりも雑也夏ニ云非也

野鷹

流

布

鷓鴣

鳩

箱鳥

果鳥 各萬葉

深山よあはれるる源氏若菜よよ太

山木よゆづるるささきしるるるささきとあはれり或ハ白

鳥ハ異名と云云白鳥ハ巢代一名也

深山木よゆづるるささきとあはれ箱鳥のあせしあはれん事と云云

雄略天皇代御時義作國つるささきとあはれ相見

びんご云人の婦子と負て山中と行きて就鳥よこ

まきくさやこころび死死るる故よんこまのこハハ

ることハハやこころハ心中畧也 河海抄 早來鳥

こまこいつり但八雲御抄より名ハ定家でも不知之
只とつりこまをこまおきこまのこまおきすとも其分
くくく一良名れ異名こまおきこまおきて或連可の
書よ春こま云仍尋其義雜といひ

鳥音トビ綻トビ 雜也春と
つら非也

蝸牛

蜻蛉カゲロウ 雜也 新式 かけらおれりゆりとしれ春こ虫か
ゆりてハ秋なるとかといひ 五言抄 夕よ軒を
よ乱死物シ夕と襖よいのらけくくくこまこま是草と
云といつるハ異説也

今更小言つりやまのきりおれをゆる春日とみり物成
こ云ハ虫よハあらず 八雲御抄 畧記之 是ハ陽焰也

ひらふれをさうあふふまふれつるをたれハ神をぬきおる
ひらふれ云ものハあつてもたれもさうなるとぬりおれハ
くいつくこと云又うきりおれ事哥も詩もさうゆ
よいつり一とらぬん新撰六帖おれ哥れ公又様神ハ
虫たものやににこまこま 藻塩草 畧記之

篠籬シノサキ 日本ニ呼コ蜘蛛
蛛モリ 曰イハ一ト

蟻

詞花 非春 新式 ありつり春よもあつりといひりま
あつり植物よ打越し句よつりて正花といひり詞
のくれやあつり云心也 新式抄 詞乃花れつりこま

春也正花よ成こ只詞れ花れ酒の花ハ春よあつり
正花よあつり問云心乃花詞れ花何乃つりつりあり

て嫌や別あるも答云人れ公もまはうさ立やか
 も心乃花の心花をなす詞の花はく并吉く人の
 常よんかやたにさりてよのつをいふ花よあさる
 無言抄よ云詞の花春よあさるいふも今京都よ春よ
 月二あよわれとありて又二可よ詞の花似世物の花
 非正花春よあさる然共式乃花よ面と嫌也自然正
 花よ用よ仕立よも雑也こりきり前後相遠せり
 新式よま心あさるこあまハ何れ穿鑿よ不可及
 非降物非冬新式
 鏡雪 同
 髮雪 土佐
 日記

頭雪

非降物非冬新式
 述懐也白髮此事也

鏡雪

同

髮雪

土佐
 日記

鬢 降添雪 頂雪

あつたになりくうら
 たり霜をいづく同

眉霜

述懐也非
 降物非冬

鬢霜

藤原氏

橘氏

催馬樂

れくく物之雑也但青柳くく橘くくふ
 小ハ春也 流布 催馬樂ハ昔諸國くく流真
 物と大者一納一時氏れ口すくくは謡歌な
 まいりくく名つくく馬と催とくくはつくく物あさ
 れるくく催と心 梁塵愚案抄 袖中抄云催馬樂ハ
 譜一条左大臣代時くくくく律呂等と定りくく

離遊

篝火

夏よあさる只雜くく一 流布 牙よくく
 火とくくく夏よあさるハ物再れ心たり

燈籠

燈籠共書之見湮槃經燈檠共見本朝式今按三字皆通稱也

網代車

桃花葉葉云々
藪之時巨之

布膠

非水邊新式雪下也
日しさす故あり

花田色

正花ありす露草此花してそめくろと花田色
といふも花田此等あつ常すす物なれ
と秋ありす雜也植物も衣類ししありす
以上いれも雜也雜此事八事ひらきゆは大綱載之
又四季所これ後雜此事も注之仍二度不載之

延寶四年林鐘十八日

杉村氏友春撰

温故目錄再返お終にふまつゆあやうりち
けふ不もかゝ又まれのゆりもおゆえは家
小四季此系物もやい巻ども部類ひらきゆ
しつてあつるも系物ゆかひ誤多き事
乃福儀わかとるえり今け抄のゆり
なゆあるいまもいゆりもゆり廬山此行
中ゆあつるも似り末代は定もわか
とゆあつるも世人年来のうらみ是り
ゆあつるも志けり老男とかくさる目
らりこけりゆあつる也

西山氏宗固

予一日訪杉村氏友春賢士出公自所撰温故日録而見示仍賦小詩以贈
 書編數帙送精神意味深長詩轉新染國
 詞音猶未絶歡看文質共彬々

真珠菴州

元文四己未年二月吉日

心齋橋筋順慶町

柏原屋清右衛門

同 与 市

求版



浪花書林

官制六諭衍義

室直清著
石川伯山筆

一冊

武家諸法度

内閣家よりと作出され方所の武家
法度の法度と定りあり方々

一冊

本朝武林系始

武家諸法度の始と終を詳し

七冊

武用辨畧

武家軍用の要を記し兼書と成す
本下義俊著

八冊

本朝弓馬西覧

い昔初め弓馬法を傳へりしは中々ありし所の故
人評法流の財源と記し未だ法射の八段を記す
故実と記しし所の秘法と記ししを記す

六冊

武家俗説

神田白旗子著し武家の事とて其の事とて
記す

五冊

甲列廿四将

大岡春一著
信玄及麾下將帥の事

一唐紙

有職小説

駒谷敬人述す和の事とて禁中法度
の別号系

六冊

右に於て水山説つる事ありし日
本橋南を町目
須原屋義去傷

